

2019年東北学院大学文学部教育学科公開連続講義 第3回
2019年11月23日(土) 13:00~15:00

テーマ：「新学習指導要領における授業づくり —— 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて ——」

Lesson Planning in Light of the Revised Course of Study :
Towards the Practice of the Independent, Interactive and Deep Learning

講師：樺山 敏郎（大妻女子大学家政学部児童学科 准教授）

1. エビデンスをもとにした効果のある事例

文部科学省の国立教育政策研究所で9年間仕事をさせていただき、全国学力・学習状況調査を担当した。その際に重視したのはエビデンスである。現在は、研究者として様々な先行研究をもとにして自分の中で論を構築しているが、国立教育政策研究所は国の教育機関なので、自分の考えよりも全国の子どもたちの学力等に関する数字を集積し、根拠を示す仕事を行ってきた。

たとえば、小学校第5学年国語の配当漢字は現行の学習指導要領では185字である。その中で一番が読みにくい漢字と書けない漢字を調査した。一番読めない漢字は「額」であった。「がく」と読むことはできるが、「ひたい」とは読めない。一番書けない漢字は画数が多い漢字と予想されるが、実際には「制度を設ける」の「設」という漢字だった。このように、子どもたちができないことや苦手としていること、課題として捉え、改善していくことをエビデンスに基づいて示してきた。

家庭の社会経済的背景によって学力が変わってくると言われている。確かに、教育投資をすれば我が子の学力が上がっていくというエビデンスが教育社会学の研究の成果で出ている。「教育効果が高い学校」と言われている学校があるが、これは学校レベルで社会経済背景から推計される学力を大きく上回っている学校のことである。それらの学校の調査でわかったことは、課題探究的な授業をこれまで以上に行っていかなければいけないということである。子どもたちは、「課題を解決したい」という学びのスイッチが入ったときには、自分で調べて考えるものである。そして、自分の言葉で第三者に伝え、相手と伝え合うことによって、国語・算数・英語も学力が高くなる傾向がある。

また、授業スタイルとして「45分や50分で何を学んだのか」「何がわかったか」「何ができるようになったか」というように、振り返りを大切にすることによって教育効果が上

がったという学校が多かった。このような事例もエビデンスである。

その他、家庭学習、学力調査の活用、一定人数の少人数による学習も効果がある。また、中学校では、実践的な研修で、汎用的でカリキュラム・マネジメント的に授業を見せ合う学校では学力が上がっていく傾向がみられる。

2. データから見えてくる日本の現状

学習指導要領は、約10年をスパンとして改訂される。2020年なら、10年先の2030年の子どもたちの姿を描いて改訂することが基本にある。現在、小学6年生なら10年後には大学生になる。現在学校で教えていることが、時代が変化したら通用しなくなるのではないかということを考えていかなければいけない。

今後の社会では消えていくだろうと予測される職業があることを、小中学生は知っておいた方がよい。人口推移からみると、急激な減少が訪れつつ高度高齢化社会が進み、元気な高齢者が増えていくのはいいことであるが、その分、生産年齢人口が減っていく。GDPも他国に抜かれていく。

そういう社会情勢の中で、国際数学・理科教育調査（TIMSS）では、小学校4年生の算数・理科、中学校2年生の数学・理科の動向を1995年から4年きざみで調査している。日本は一時的に点数を下げることもあったが、近年は順調に回復傾向にあり、2015年は平均得点が上昇して上位を維持している。これは喜ばしいデータである。しかし、同じTIMSSの調査では、子どもたちの情意面である「勉強が楽しい」「勉強すると日常に役立つ」という割合が極端に低い。これは日本の教育に不十分なところがあるというデータでもある。

国際学力調査（PISA調査）では、2003年調査においてPISAショックがあり、2006年調査でも点数が低かった。「高校でできていないのは中学校や小学校に原因があるかもしれない」という疑問から、そのものさしを作ろうというのが、2007年から始まった全国学力・学習状況調査だった。全国学力・学習状況調査は、テストではなく、あくまでも調査である。調査結果を較べるのではなく、「漢字を書けないのであれば書けるようにしましょう」「割合ができないのだったら割合のことをやってください」ということを呼びかけて、今年で12回目（東日本大震災の年には中止）になった。

これまで、私は全国各地を回って、いろいろな都道府県や市町村に対して、子どもたちの力を伸ばすための助言や指導を行ってきた。そのうち、沖縄県には150回ぐらい行っているが、点数を上げるために行っているのではなく、課題の要因を一緒に探って「わかる授業」「楽しい授業」を行おうとする気運づくりに努めた。その積み重ねで沖縄県の学力

は向上している。

3. 学習指導要領の方向性

今回の学習指導要領の改訂では、3つの資質能力が規定され、何を学ぶかという教科の再編が行われて、「主体的・対話的で深い学び」という視点をもとにした授業改善の方向性が示された。

アメリカの国立教育研究所が示した「ラーニングピラミッド」の報告によれば、「レクチャー」のように、先生が一方向的にしゃべる授業では5%の学習定着率である。他人にわかったことや考えたことを伝え合って共有する授業では、90%の学習定着率になる。

3つの資質、能力を育成するためには、知識の理解の質を高めることが必要である。全国学力・学習状況調査で「A問題はできるがB問題ができない」という声がある。しかし、それはA問題の知識の質が上がってないから、B問題ができないということである。

全国学力・学習状況調査の「ことわざの意味の理解」の問題で、「石の上にも三年」を四択問題で行ったところ正答率は71%だった。また、「急がば回れ」は86%とよくできていた。このような知識の有無を問う問題も作るが、「故事成語の意味や使い方を理解する」という問題では、たとえば「五十歩百歩」を短い文脈の中で使えるかと問う形にしている。同じように「漁夫の利」と「百聞は一見にしかず」を問題として出した。その結果、故事成語の意味はわかるものの、3つの文章の中から選ぶ形になると正答率は半分ほどであった。

このように、知識を安定的に活用できるという発想で、子どもたちが知識を使える力を授業で育てることが大切である。特に基幹教科では、足腰を鍛えるために必要なことである。

現在、私が指導に入っている学校の多くがカリキュラム・マネジメントの研究を行っている。どのようにして全部の教科等と手をつないでいくのか、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の基盤となる能力について考えることが重要である。これは、今に始まったことではなく、以前から言われていたことである。

4. 記述式問題の在り方

大学入試の記述式問題が話題になっているが、プレ問題として次のようなものがあった。交通事故統計資料に基づいて作成された交通事故の発生件数、負傷者数、死者数の3つのグラフを見て、平成2年以降、他よりも早く交通事故の死者数が減少傾向になっていることを4人の高校生が話している。オープンエンドの考え方で複数解から最善解を選ぶものであり、一番妥当というものを論拠となる資料をもってきて論破するという問題である。

このようなことを言える授業を高校で行おうと意図している。

問題文のAは国民の意識の変化が関係について述べているものであり、交通違反で検挙された人数の推移がわかる資料が必要と考えている。たとえば、飲酒違反やスピード違反が少なくなっているものである。

Bは、自動車の台数と安全性の関係について述べているものである。「つまり、自動車の台数は年々増加し続けているので事故件数や負傷者はなかなか減らなかったけれども、」の次に続く内容を書くことが問題として出されている。その後に「車の安全に関する装置の装備率の推移がわかる資料」のことが書かれており、その論理に基づいて記述するものである。

Cは、医療の進歩が関わっていると話している。その裏付けとなる資料として、「交通事故の救急車の出動回数の推移と救命率の推移が分かる資料」が必要と述べ、その資料を見れば、何がわかるのかを記述する問題になっている。

これぐらいの内容を話し合わないとアクティブ・ラーニングにはならない。そして、なぜそうなるかということ筋道立てて、自分の言葉で相手に伝える授業を日ごろから行わせたい。

このような問題は他にも見られる。日能研では「あなたの『宝もの』を一つあげ、本文をふまえて説明しなさい。」「もし、あなたが第一次産業に仕事として携わるとしたら、『第6次産業化』に向けてどのような取り組みかをしたいですか？ 生産物などを一つ例にあげ、取り組みたい内容を具体的に説明しなさい。」といった問題を出している。私立学校では以前からこのような問題が出され、どのように考えるかということが問われている。大学入試も考えていかなければいけない。

5. 主体的・対話的で深い学びとは

主体的・対話的で深い学びの授業改善を考えるポイントとして、次のようなアプローチを全国の教師たちに示している。

- ① 習得・活用・探究のサイクル化を図る
- ② 学習の見通しを大切にし、問いが常に連続するようにする
- ③ モデルを提示し、そのイメージ化させるために教師はもっと出る
- ④ 何のために交流をするのか。位置づけが形骸化している
- ⑤ 学習を振り返り、メタ認知することが大切である

「主体的・対話的で深い学び」の中で、「深い」の意味がよくわからないという声がある。深い学びとは少しずつ学びが深まっていくプロセスのことであり、そのような授業を目指

すべきという方もいれば、深い学びは「なるほど」というような腑に落ちるようなものという方もいる。

大切なのは、深い学びを抽象的にとらえるのではなく、まずは「量的にいろいろなことを知っている」「いろいろな知識や技能をたくさん獲得し活用できる」と考えることである。深い学びとは何となくわかっている状態ではない。自分の中に確立して、知識と技能の量を増やしていくことが大切である。

また、子どもたちが興味をもって活動に取り組む場合には、問いが連続したうで見通しを大切に、ゴールが少し見えた方がよい。イメージが欲しい。知識や技能が身に付いたらそれをメタ認知していくことが大切である。

子どもたちと教師の対話では、何のために行うかという視点が弱い。教師は教える場面と子どもたちが思考・判断・表現させる場面を位置づけることが重要である。

新たな資質能力が育まれるのが深い学びというのであれば、資質能力が量的にも質的にも更新されていくことが大切である。簡潔に言うなら、本時のねらい・単元のねらいを達成することが第一である。深かったか、深くなかったかという議論の前に、子どもたちみんなが本時のねらい・単元のねらいを達成できたかどうかを考えることが大事である。

国語は文法、読み書き、音読を行わなければいけないという教師がいるが、それらを固定観念で詰め込まなければいけないという考え方だと時代に遅れる。「それらの知識が活用できる」という授業をしなければいけない。

一方、子どもたちの言語活動は活性化しているが力を身に付けさせていない授業も見られる。学びには文脈があり系統的に行う必要がある。習得の「a」が、単元・本時で既有的知識・技能、思考・判断の力が働いて、単元の出口で「A」になる。これが次の文脈で「a」になり、また次の段階で「A」になるのが学びであり、それらができるだけ探究のプロセスに位置づけることが大切である。

そのためには、子どもたちが新たな学びを欲したときに教師が問いを与えたい。啐啄同時という言葉があるが、卵の中で産まれてくるときに殻をたたきタイミングで親鳥は突くようにしたい。そして、既有的知識と新しい知識を組み合わせ、さらに次へと押し上げていく学びを展開するようにしたい。

6. 全国各地の事例から—結びにかえて

【事例1】新潟大学附属中学校に訪問したときに、問いの連続性を考えたよい問いがあった。「『東方見聞録』での蒙古襲来について今あなたが書くとしたら、どのようなことを書き加えますか」というものである。東方見聞録には誇大な表現があり、スタンドポイント

を変えると事実が新たに見えてくる。子どもたちは、フビライが国書を送る場面は征服ではなくて友好と直すというように、文章をリライトしており楽しそうだった。

【事例2】小学校第1学年での事例だが、見通しでは「学習計画では1時間目から8時間目のうち今5時間目だね。今日はこんなふうにしてしてやろうね。」「今日のめあてはわかりやすい文を書こう。」ときめ細やかに示していた。

【事例3】「言葉のキャッチボール」の授業例では、教師は「この通りにやりましょう。」というグッドモデルを示している。このモデルの適時性やタイミングが大事である。それだけではなく、不完全なモデル、エラーモデルも示したい。「見方や考えが変わった人がいるが、なぜだと思うか?」というようにエラーモデルやミスティクを含めて、ゆさぶりがあったほうがよい。

【事例4】この学校では、パネルディスカッションを行っており、「動物園の動物は幸せかそうではないか。」といった内容を教師たちが二つに分かれて、実例を示している。子どもたちにさせるのなら、教師が実際にやってみることが大切である。可視化できるビデオを準備するなど教師がモデルを準備することが必要である。

「深い学び」と「浅い学び」があり、一方で「アクティブな学び」と「受身な学び」がある。それらを組み合わせると、very poorなのが受身で浅い学びである知識偏重主義である。受身だが深い学びは、教師が一定の知識を与えていくことも重要である。子どもたちにとっては受身だが、習うことでたいへんよい勉強になることもある。一番良いのは、アクティブに活動を行い、考えることである。つまり、深い学びは考えて行動することである。

「高校生アトライター大賞」というコンクールでは、草間彌生氏のアート作品に触れて鑑賞文を書く。主催者は、芸術の感動を表現に移すことができないか、これまで欠けていたものを見直して人材を送りたいという趣旨で行っている。教師ができるモデルは限界があるが、このような鑑賞文や感想文のグッドなモデルは身近に存在する。そのような教材を良い情報を、深い学びにするために与えていくようにしたい。

(文責 佐藤)